

# 津波死傷ゼロの奇跡



東日本大震災の大津波は、岩手県沿岸部の12市町村で計4664人もの命を奪い、1600人を超える行方不明者を出した。その中で、犠牲者だけでなく負傷者も出さなかった唯一の自治体が、同県最北端に位置する洋野町だ。同町によると、住宅やインフラ、水産業を中心に甚大な被害があり、損害額は約66億円に上ったものの、人的被害はゼロ。同町の取り組みを全国の防災に生かさないかと現地を歩いた。(小倉貞俊)

## 岩手県洋野町

洋野町は二〇〇六年一月一日、太平洋に面した種市町と内陸部の大野村との合併で誕生した。全加え、住民の津波に対する警戒心が強かったことは、旧町の「海」と旧村が大きい」と分析する。同町の海岸線は全長二

「緑」をイメージして

おり、人口は約一万九千人。近年は、県内トップクラスの漁獲量を誇るウニのブランド化に力を入れ、「ウニの里」をPRしてきた。  
**最大で15倍**  
震災の震度は4だったが、最大で高さ十五メートルの津波に襲われた。町中心部の魚市場や海浜公園をはじめ多くの水産加工会社や全壊。沿岸にあった水産物の種苗栽培施設では、稚ウニ約六百万個や稚ナマコ約四十万個が水槽ごと流され、町内の漁船の約七割、二百五十八隻が流失した。  
こうした被害を受けながら、なぜ人的被害がなかったのか。

## 高い意識「震度3で高台へ」



八木地区の高台にある神社(右上)への津波避難路=岩手県洋野町で

十六キ。うち三キの区間、底などもあり、避難がス地区は海岸が入り江になって高さ十二メートルの防潮堤がムアであったという。実整備されており、防潮堤際に訓練がどれほど有効を乗り越えた津波は一方だったのか確かめるた所だけだった。また、防め、同地区を訪れた。潮堤が整備されていない、漁業関係者など約三百八木地区では、訓練の徹八十世帯が居住する八木

「震度3以上の地震が起きたら、この辺の人は皆、すぐに高台に逃げる習慣があるんです」。こつ話すの、家を津波で流された美容師荒谷礼子さん(仮名)は、震災発生時は家族と車に乗り込み、出かけるつもりだった。激しい揺れが収まるのを待ち、「家に戻っちゃいけない」とそのまま車で高台の避難指定場所に向かった。  
荒谷さんは「ニュースなどで犠牲者が出たと聞くと、一家財道具を取りに戻った人もいたのかな」とやり切れなかった。私たちが反動的に逃げたから助かったけれど」と声を落とす。

仮設住宅で暮らす元水産加工会社員の大西昭彦さん(仮名)は、漁港の会社から、職場の同僚たちと高台にある神社まで逃げた。大西さんは「揺れを感じて避難することは、一ルが寸断され、復旧工年に二、三回はある。今事の真つ最中。津波でひはげたガードレール、残骸になった漁業関係施設のほか、がれきの山も積み上がったままで、震も娘もすぐに避難して無事だった」という。

八木町神社



こつした意識の背景には、同町が苦しめられた津波被害の歴史がある。一八九六（明治二十九）年の明治三陸地震では二百五十四人、一九三三（昭和八）年三月三日の昭和三陸地震では百七人が犠牲に。八木地区でも大勢が亡くなり、海岸沿いには「想へ惨禍の三月三日」と記した巨大な慰霊碑が立つ。

昭和三陸地震を経験した醍前守三さん（88）は、「明治の津波では山の中腹まで波が来た」と聞いた。昭和の大津波では親戚が亡くなり、機会があるたびに津波の怖さを話してきた」と振り返る。当時を知る人はほとんどいなくなったが、その記憶は受け継がれている。

自主組織も

「地震が起きたら、一歩でも高いところへ」という教えは、誰もが心に刻んでいる」と話すのは、地区の自主防災組織の幹事、蔵崎浩さん（68）だ。同地区ではかつて、防潮堤の建設計画が浮上したが、地権者の絡みで頓挫。蔵さんは「防潮堤がないからこそ、逆に津波に対する危機感が強くなって」といふ。

〇八年八月、同地区は

# 訓練、声掛け、記憶継ぐ

自主防災組織を立ち上げたテントを張り、一時避難（※）は、人的被害がゼロ。自治体と比べ、格段に早げ、津波対策の意識啓発、所を開設した。「海岸か、だった理由について」「住い。また、海岸までの道に尽力。住民同士で「おらみんな十分ほどで上っ。民と五百八十人の消防団を封鎖し「港の様子を見はよう」「何してた（こ）てきた。翌朝には全員の員、消防署の三者が危機に行きた」という住民んには「おやす。所在も確認でき、想定通。意識を共有できた」とを力すべく制止したといひなどの声掛けを徹底りに動くことができた」とみる。

「田舎でも近所と胸を張る。こつした自。町内二十六カ所の水門。庭野分署長は独特の標付き合いは薄くなりつつ。自主防災組織は町内に七つは、消防団員が分担して。語を掲げている。「消防ある。お年寄りがどうし。あり、今後増える見通。閉鎖する決まりになって。団員が率先して、避難者ているかを把握することした。一方、同町を管轄する。が完了するまでにかっ。いて「団員が悠然と構え

また、高台の避難所に久慈広域連合久慈消防署。九時間はわずか十二分。ていると、住民も油断しつながら幅一。二層ほどの庭野和義・種市分署長。二十一二十分だった周辺てしまう。真っ先に血相の連を二十本ほど整備。交代で草むしりをするなとし、いざこつとときに備えてきた。「津波避難目標地点（こ）は海拔〇〇」と記した看板も約二十カ所に立て、避難の目安にしている。

蔵さんの自宅は高台にあり、震災直後には庭に

①「想へ惨禍の三月三日」の碑  
②津波被害を受けたJR八戸線の線路に立つ蔵さん



## 避難路の草むしり、海拔看板20カ所

を覚えて逃げ出すように「ただいばいばないうえ願わせないう」と説明する。洋野町の取り組みの効果があらわらうかのようだ。政府の中央防災会議専門調査会は九月二十八日、津波被害の軽減のため五分程度を目標にした高台避難の重要性を指摘している。

ただ、庭野分署長は「震源地がもっと北側だったら、被害が拡大したはず」とも指摘する。同町は震災復興計画の中で、防潮堤や護岸堤の整備など「災害に強いまちづくり」の推進を掲げているが、「時間と費用がかかるハード面の整備も大事だが、日しろから住民の逃げる意識を高めるソフト面の充実はさらに大事。今後、絶対に油断はできない」と力説した。

MEMO

全員無事だったとは奇跡としか言いようがない。だが話を聞くと奇跡ではなく当然だった。先人の悲劇を繰り返さないように備えてきたのだ。震災の後、私も便利さを追求する生き方を見過す決意したが、のど元過されは、最近少しでも不便だと文句をたれてる。あの決意はどへ行ったのか。（立）